



カントウータ

Cantuta

No. 39



リベラルタのマドレ・デ・ディオス川（正面）とベニ川（左）の合流地点の眺望と渡し舟（Ponton）
（撮影者 杉浦 篤）

1. 2018年8月：ポリビア旅日記（その5） 渡邊 英樹
2. 日本人が見たリベラルタ（その1） 大島 正裕
3. じゃがいもの旅の物語（最終回） 杉田 房子
4. 1990年ころのポリビア通信事情
（その1） 吉田 憲司

1. 2018年8月：ボリビア旅日記

(その5)

日本ボリビア協会相談役
元海外移住事業団ボリビア駐在
渡邊 英樹

8月13日 つづき;ジビエ料理を堪能

池田篤雄さんから息子の潤さんが案内するので「ぜひ、ホッチとスルビを食べていって欲しい」と言われるので、そのご好意に甘えることにした。

早速コロニアサンファンへの入り口であるキロゼロ地点まで戻り、ヤパカニ河々岸のジビエ(狩猟肉)料理の店に案内してもらう。45年前には、河の畔に小さなモタク小屋の店が一軒だけあったが、今は観光客目当てに何軒もの店が連なり活況を呈していることがうかがえる。



写真1-1 ヤパカニ河岸のジビエ料理店の前で

45年前に家族でここに食べに来た時には、妻が「美味しい、美味しい！」と言って子供の残したものまで食べたが、食後に小屋の裏に回ってその生きている実物を見た途端に食べたものを全部嘔吐してしまった。食べたのがホッチという世界一大きいネズミの一種だったからだ。しかし、山の肉としては鹿肉より珍重された。

それもそのはずで、ホッチはイペリコ豚同様に木の実に主食とするので、一度食べたら忘れられない味になる。なかなか言葉でその味を言い表せないが、噛んだ食感は「豚肉と鶏肉の中間のような感じ」と言えなくもない。池田さんも月に1回は食べに来られる

と言う。最近ではサンタクルス市から食べに来る人も多く土日はいっぱいになるらしい。そう簡単に獲れるものではないので、中には、知らない観光客にはホッチと称してカピバラの肉も出すところもあるとか。ご用心である。



写真1-2 しっかりと厚さもあるホッチピンタードの肉

夜行性のこの動物を獲るには、罠を仕掛けるほかに木の葉のなる樹の上部に板を張って腹這いで辛抱強く待つのだという。市販の紙巻タバコなどを吸うと、中に含まれる香料を敏感に感知して絶対寄って来ないので、ネグロというタバコの葉だけで作ったものを吸うのだとか。これだと山火事の後の匂いと同じで警戒心を抱かれないらしい。樹の下に来たところを銃身の上につけた懐中電灯で光る二つの目の間をパッと照らし、一瞬ひるんだ時に引き金を引き射止めるとのこと。ホッチの中でもこのブチのあるホッチピンタードが一番美味である。寒さと外敵から身を守るために皮下脂肪の厚さは3センチ位あり、手に持つとズシリと重い。

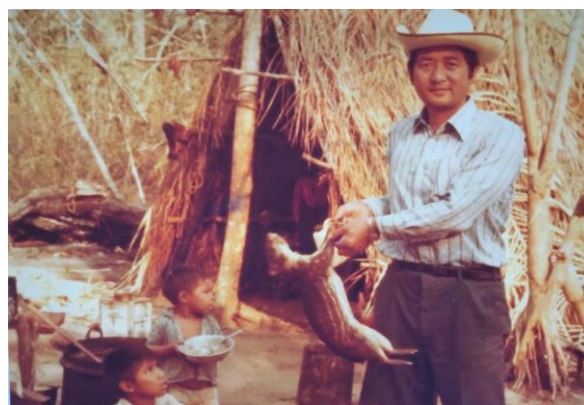


写真1-3 ズシリと重いホッチピンタード。コンセプションの伐採業者のキャンプで。(1978年)

ホッチの次に美味しい山の肉は鹿だと思う。誰にでも食べられる優しい味である。鹿は敏捷なので追っても射止めるのはけっこう難しい。一度、4人で追って浅い草むらの中に逃げ込んだのを確認して探したがなかなか見つからない。四方から追い詰めていったが姿が見えない。わずかに15センチ位の丈の草なのにうまく横たわって隠れられてしまった。見つけれないまま包囲を狭めていったら、いきなり目の前で2メートル位跳び上がって現われ、ジグザクと素早く身を交わして逃げられてしまった。四方から追い詰めていったので、いたずらに発砲したら仲間を撃ってしまう恐れがあったからだ。

やっと射止めた獲物は、原生林の中の民家に持って行って捌いてもらい、そこで一食した後は捌いてくれた家族に全部残してやる。捌いている最中に少年が素早く鹿の蹄をポケット入れたのを見て問いただすと、2〜3日間ポケットに入れて腐る直前に食べるのが一番美味しいという。この辺の味覚になるともうついていけない。ただし、こういう体験をしていると「食事をするという行為は、植物や動物の命を断っていることである」と心のどこかにズシリと感じる。自然からの恵みをいただくという感謝と命のあるものに対する畏敬の念は、この少年の方が我々よりずっと強く持っているに違いないと思った。きれいにカットされたものばかり食べている都会人にはこの感覚が完全に欠落していると思う。

美食を追求して、賞味期限切れの食物がいつも簡単に大量に捨てられている日本の現状、それはアフリカの難民の食糧を賄える量をはるかに超える、という説もある。五感を働かせて食べられるか否かを自分で判断できなくなってしまった日本人は修羅場を生き抜く力があるのだろうか？

池田さんに案内してもらった店は、ジビエだけでなく釣った川魚も提供していた。大ナマズのスルビは、50年前もサンタクルス市の中華料理店の

「白身魚の餡かけ」に使われていた。その頃は海の魚がまったく入って来なかったのも、魚恋しさによくこれを食べに行った。家でも、妻がスルビを買って

来てミンチにして人参などを入れてガンモドキにして食べたりしていたので、我々にとっては懐かしい味である。



写真1-4 捌いた鹿の頭の下で。野性に生きると食べるという行為は、他の生き物の命を頂くことと肌で感じさせられる。(右側、1979年ブラジル国境近くで)



写真1-5 大きなものは1.5メートルにもなるスルビ。(1979年筆者撮影)

戦後の開拓移民として、原生林の奥深く入植したコロニアサンフアンとコロニアオキナワの人々にとっては、ヤパカニ河とリオ・グランデがもたらす魚と、山の動物は貴重なタンパク源であった。原生林を伐採して、山焼きをして農耕地を作る作業は、斧やノコギリ等の鉄製の道具があったとしても、古代人が狩猟生活から農耕に移行していった過程で経験した労苦に近いものがあったはずである。

穀物は栽培できるようになっても動物性タンパク質

は釣りや狩猟に頼らざるを得ない。特に、海に囲まれた日本で育った者には、もし、魚がなかったら食の方から日本への郷愁で精神的に参ってしまう。「ヤバカニ河があったから、サンファンでの定住を決意できた」と語った人がいたが、海のものではないにしても、この魚の味は、望郷の心を癒し、釣りの醍醐味は日々の労苦をひと時忘れさせてくれるものであったに違いない。店もなく、交通の便もない開拓当初は、捕獲できる山の肉は何でも食べたという。

コロニアオキナワの中央病院の庭にイグアナが入り込んで来た時に、可愛い顔をした看護師さん達が、「おいしそう!」と言って棒を持って追いかけていったのには驚いたが、それによって入植当初の食料事情が偲ばれた。聞けば鶏肉に近い味というので、「鳥の先祖は恐竜」という説に思わぬところで納得したのだった。



写真1-6 コロニアサンファンの事業団宿舎に現れたイグアナ (1970年)

メルカード・ロス・ポーソ

ホッチとスルビですっかり満腹になって再び池田家に戻ってお礼を述べて帰路についた。ホテルに着く前に、CAICO(コロニアオキナワ農牧総合組合)の近くのメルカード・ロス・ポーソに立ち寄る。当時、妻は毎週1回は、この市場に買い物に来てヒレ肉を1本を買っていた。その頃は、肉を小分けにして売る所はなくキロ単位での販売であったが、ヒレ肉は「本」単位であった。ヒレ肉は牛1頭から左右で2本。1本が7キロ位あった。その1本を週一回定期購入しないと手に入りづらかったからだ。当時、日本人が1年

間に消費する牛肉が7キロと言われていた。しかし、我が家には、日本からの出張者や移住地からも頻りに来客があったし、移住地の若者は平気で1キロは食べたので、余ることはほとんどなかった。

ところでポーソとは沼を意味し昔は湿地帯であったから、市場内の通路は常に湿っていて、食物の残滓の腐った臭気が一面に漂っていた。市場だけでなく、50年前はプラサ(カテドラルのある中央広場)から500メートル四方がロセッタ舗装されていただけであった。その外は砂地の道路で、各家の炊事の水はここに流されていて、道路の真ん中は常に水溜まりとなっていたので、饅えた匂いはサンタクルス(サンタクルス)の街の匂いと言ってもよかった。当時は長旅の後にエル・トロピリーヨ飛行場に降り立つと、重い湿気のある空気の中にその匂いを嗅いで懐かしさを感じたのだから「人は、住めば都」である。道路の水溜まりはスクールが多少はきれいに流してくれていたが、人は道路を歩かず路面から一段高いコロニア風に長く伸ばした家々の軒下を歩いた。雨季には、道の角に人を負ぶって反対側に渡してくれる人夫を見かけることもあった。

そのサンタクルスが激変したのは、天然ガスの産出以後である。今は、道路ばかりでなく、市場内も舗装され、露店ではなく天井も床もある建物の中に店があるので、昔の匂いはなくなっており衛生面はかなり良くなっていると見受けられた。但し、その喧騒ばかりは昔と変わらなかった。50年前は、市街地の外れであったこの市場やCAICOの事務所は、今や、人口180万人とも言われ、膨張を続けるサンタクルス市のど真ん中と言ってもよい場所になっていた。

(つづく)

2. 日本人が見たリベラルタ

—その1—

財団職員

明治大学島嶼文化研究所客員研究員

大島正裕

1. はじめに

2014年から17年まで仕事でラパスに駐在する以前の私は、「ボリビアといえばアンデス」と思っていた。私自身の研究対象もアンデスであったし、そこに広がる先住民文化は十分に魅力的だった。しかし、一旦ボリビア北部のベニ県やパンド県に出張するやそれまでの自分の価値観は大きく揺さぶられた。それは、このボリビアのアマゾン地域に、多くの日本人が痕跡を残していることに驚嘆したからだった。例えば、私は公務でアマゾン地域パンド県の「ムクデン」と名付けられた小さな集落を訪問したが、その地名の意味が、「奉天」（現在の中国東北部瀋陽）だったことにあとで気づいた。この辺りに移住した日本人が日露戦争の勝利を記念して名付けたところなのか、その経緯はあまりよく分かってはいないのだが、いずれにしても日本人が名付けた地名であることは確かであろう。勿論、知識としては戦前の日本人がペルーから流れて定住したことは知っていたものの、実際に現地を訪れると、あまりにも日本と異なる景色を前にして、ここに日本人が定住したとはどうしても思えず、大きな戸惑いを覚えた。そしてその戸惑いを放置しておくのはいかにも惜しい気がして、この程、折角このような寄稿の機会を得たので文章として残しておこうと思いついたのである。以下、リベラルタを中心に主に戦前の日本人移住者について考えてみたい。

2. リベラルタの誕生

2019年は、ペルーとボリビアにとって最初の日本人移住から120周年であった。1899年移民会社（森岡商会）と契約した出稼ぎ移民としてペルーに入った780人のうち91名（これに森岡商会の2名の監督を含めて93名）がボリビアのラパス県北部に移動し、

ゴム園に入ったのは1899年8月であった。しかし記録上この93名の中でボリビアに残ったのは僅か2名のみであり、1899年が日本人移民の嚆矢であるとの歴史的事実は重要であるにしても、「移住」という表現はあまりにも大袈裟ではないかと思われる。

ところが、1908年頃からボリビア北部の町リベラルタ（Riberalta）に日本人が増え始めた。私は、2016年と2017年、2度ほどこのリベラルタを訪問する機会を得たが、埃っぽい大地をモトタクシー（バイクタクシー）が往来している印象のみが強く、そこにリベラルタ日本・ボリビア文化協会の建物が堂々とたっていることに些か場違いな印象を受けた。実はその建物はこの地方都市の誰もが知っていて、日本人はこの北のアマゾンで馴染みのある普通の住民なのであった。

リベラルタにおける日本人の増加は、ゴム採集等の収益の上がる商売を求めてペルーのマルドナードからボリビアのリベラルタへ移動、定着した結果であった。リベラルタはボリビアにおける戦前の日本人移住地としては最大規模を誇ると共に、戦後はリベラルタに在住する沖縄人が琉球政府に働きかけることで現在のサンタクルス県オキナワ移住地の基礎が築かれた。これほど重要な町であるにも関わらず、リベラルタの全体像は日本ではほとんど紹介されていない。また、私が知人のボリビアの歴史家に質問してまわったところでも、この地方を専門とするボリビアのアマゾン研究者は少なく、「リベラルタ史」なるものはなさそうだった。

3. 「リベラルタ」の名前の由来

日本人移住地としてはサンタクルス県の二つの移住地（サンフアン移住地及びオキナワ移住地）が有名であるが、戦前に移住したベニ県への移住者はそれらよりも遥かに多数にのぼる。この移住者の子孫からは先年話題になったチェ・ゲバラと共に中南米解放を目指して戦ったフレディ・マエムラ（トリニダー市出身）も出ているが、リベラルタ出身としては、詩人としてイベロアメリカ世界に名前を轟か

すペドロ・シモセが名高い。因みにシモセの父は、山口県出身者の下瀬甚吉で、リベラルタの日本人社会で重きをなした人である。このシモセの詩集に『リベラルタ』という作品がある。この作品については後日触れてみたいのだが、まずはこのリベラルタという中南米ではあまり馴染みのない町の名前の成り立ちが面白いとみえて、当時在ブラジル日本大使館の一等書記官であった野田良治が1930年頃に再訪し、次のようなエピソードを書き留めている。

リベラルタが現在あるところは、1884年（リベラルタ市役所の公式な文書では1882年）までは居住者のいない処女林に覆われていた。この密林の中に野生のゴムの樹があった。ゴム林を探していたプラシド・メンデス(Plácido Méndez)なる人物が、ベニ河河岸の高台に一軒の小さな家を建て、ここをゴム採集の根拠地とした。その根拠地として定めた日が5月3日の聖十字架の日にあたるということで、集落の名をラ・クルス (La Cruz) と名付けた。ところが、1884年7月（リベラルタ市役所公式文書1885年7月7日）にこの地で店を構える商人フェデリコ・ボド・クラウセン(Federico Bodo Claussen)がこの地が高い河岸にあることから、彼の店の名前を「Riber Alta (高い岸边)」と名付けた。その後この商店が有名となり近隣に名前が知られるようになり、「リベラ・アルタ」が縮まり、「リベラルタ」になったという。なお、リベラルタ市役所のホームページを参照すると、1894年2月20日リベラルタ創設宣言 (Acta de la fundación de Riberalta) が掲げられており、この年月日にリベラルタが誕生したことが分かる。野田によるとこの創設時の人口は252人であったという。これらは、当時の人口調査でも裏付けられており、非常に小さな集落であったことが分かる。その後、1900年1月にはベニ県のバカ・ディエス郡の郡都となった。

4. 河川交通の要路；リベラルタ

河川の要路にあるリベラルタは、20世紀初頭、決して辺境の町ではなかった。野田良治の『南米の

核心に奮闘せる同胞を訪ねて』（1931年）のタイトルにある「南米の核心」とは、ボリビアのアマゾンを中心に広がるペルーやブラジルの一部を加えた奥アマゾンで、地理的に南米の中心をなし河川を交通路とした地域である。野田は、この地域は「河川の領内に陸地が居候」と述べ、河川こそがこの地域の主役で、陸地は、その河川の間広がる空間でしかないとユニークな認識をしている。リベラルタはゴムの集積地として栄えたとき、まさにドイツ、ブラジル、ペルー等の多国籍の人々が集うコスモポリタンであったし、河川を通じて世界と結びついていたのである。



写真2-2 出典：野田良治『南米の核心に奮闘せる同胞を訪ねて』（1931年）

この町が瞬間に規模を膨張させていった要因については、周辺がゴムの原生林であり、それから採取された天然ゴムをタイヤの原料として、19世紀

末から北米で自動車産業が発展したことにより、急速に需要が伸びたという世界経済のレベルで考えることもできるが、やはり町の繁栄は、河川網の要路にあったことに尽きるであろう。ペルーから走るマドレ・デ・ディオス河とベニ河の交差点に位置するリベラルタは、ゴムの集積地として圧倒的な重みを示し、特にマドレ・デ・ディオス河は、ペルーからボリビアに転住する日本人のルートにもなっていた。この日本人の転住の「流れ」については次回以降詳しく紹介したいと思っている。

(つづく)

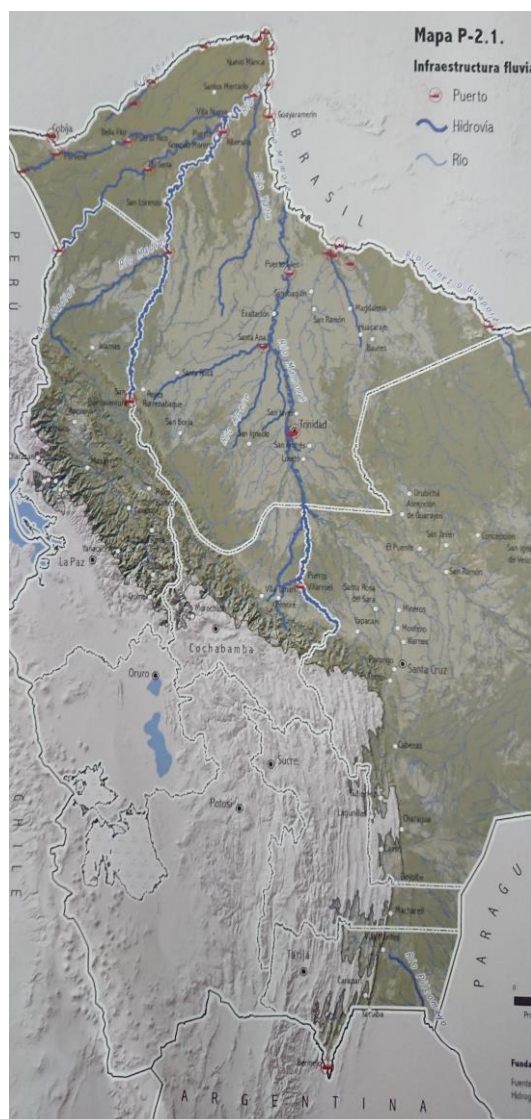


図2-1 出典: *Atlas Socioambiental de las Tierras Bajas y Yungas de Bolivia*, Editorial FAN, 2015 (青い線が河川路で、縦横に巡っていることがわかる)

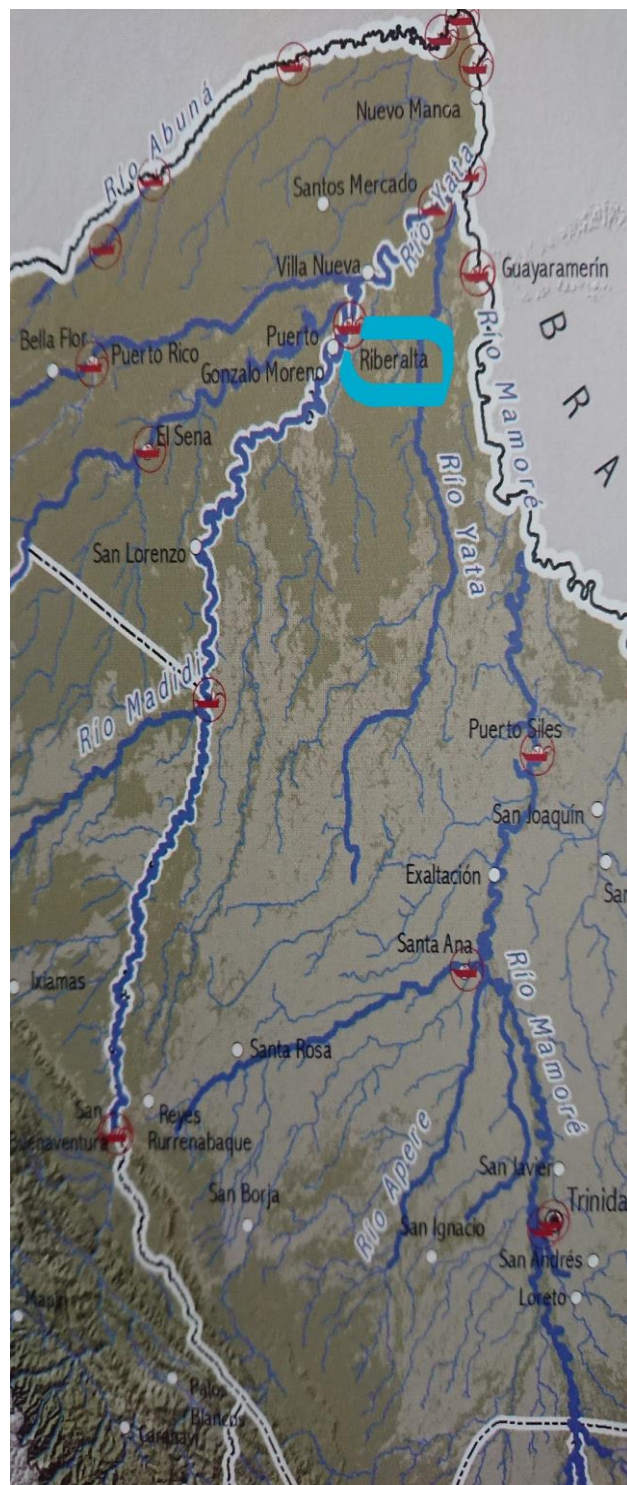


図2-2 上記地図の拡大。青い囲み部分がリベラルタ同市が河川交通の要路に位置することが分かる。

3. じゃがいもの旅の物語(最終回)

旅行作家

杉田 房子

そしてマクタン島で現住民と戦って死亡したマゼランから指揮を代わったセバスチャン・エルカノが率いるわずか一隻、18人の船乗りが、さらにその翌年の1522年9月6日サン・ルカル港に帰着するという満三年の惨憺たる航海でも歴史に明記されているが、まったく食料の補給がなかった太平洋横断の間の状況を、水先案内役のイタリア人ビガフェッタは、彼自身の日記にこう記している。

「蛆虫のわく古ビスケットに、悪臭を放つ黄色く濁った飲み水。それも乏しくなって船具の牛革を海水にひたして柔らかくし、あるいは船材をけずって作った鋸屑を海水にさらすなどして食べる。ネズミは大変な御馳走であったが、ついにはそのネズミも姿を消した。いずれにしても歯が欠け落ちた水夫には、もう噛むことができなかつたろう。水夫たちは身動きするのさえつらく見えたのは当然だが、へたに動いて皮膚を傷つけてでもすれば、いつまでも血が止まらない恐怖も、水夫たちが働きたがらない理由だった。」

南米大陸南端をまわったマゼランがもう少しアンデスに近寄って、インカの筏の船隊と出会ってでもいたら、パパスのじゃがいもを手に入れてビタミンを補給できただろうし、石のような永遠の食物チュノで船具の木や革まで食べる悲惨から免れることもできたに違いない。

そういう悲惨と悲劇が、帆船時代の航海史にはほかにも多いことが、1776年7月に始まる第三回目の大洋探検航海で客死する不運にあったとはいえ、最終的には4年3か月にわたる航海中に、194名の指揮下将兵のうち死者はわずか12名、うち病死者は5名とはいえ1名はイギリス出発前からの持病によるという抜群の衛生管理と健康維持を記録した、あのクック船長の名と業績を高らしめた理由の一つとなっている。もちろん、健康維持には食べ物が不可欠で、食べ物は不衛生であってはならないから、イギリス出帆後間もないのにカナリア諸島でじゃがいもや玉ネギやカ

ボチャなど保ちの良い野菜を補給したクックの思慮深さは、並々ならぬ衛生観念をも物語っている。

もともと、東方の海のひろがりをつくアジア人の船では、事はもっと簡単に考えられていた。暗い船底は適当に通風をよくしておきさえすれば、意外に涼しい。むれないように藤や竹で編んだ籠にいれ、新鮮な葉で覆えば、野菜にしる果物にしるかなり長い間保った。船乗りは駄目になりそうなものから食べることにしていたから、残ったものは鮮度保証付きの立派な商品として通用する。

事があまり簡単すぎるので、食料といえば保存を前提に考えるポルトガルやオランダの船乗りたちは、アジア人の船乗りが食事をするのを見るたびに、それがあまりにいろいろとたっぷりあるので、長い間こう思っていたという。

「あいつらは積荷泥棒で、積荷を勝手に食ってしまった」

そうした東方世界のひろがりや、海ばかりではなく陸の道も果てしないことで奥行きをさらに深める。

「キタイ(中国)の船は十隻ほどまとまって航海してくる。運んでくる商品は金銀、真珠などにドンスやシュスなどの織物と樟腦、明礬など。これを丁香、胡椒と交換して帰る」

ということポルトガル人レイ・デ・アラウジョは1510年にマラッカ港で見聞しているが、1512年から15年まで滞在したトメ・ピレスはこう記している。「シナ(中国)とはシャム(タイ)やペグー(ビルマ)経由の陸路でも商品が往来する。道程の半分は河、残りは片道一カ月の山道」

「別に北東へシャムに向かう道もある。途中のカウシ・シナ国は豊かだが、シナの山は険しい。カウシ・シナとはシナの国という意味」

カウシ・シナは「交趾支那」のことで、今のベトナム北部にあたる。ヨーロッパ人がインディア(インド)と並んで長いこと東方世界そのもののように思っていたキタイの国を、初めてシナと呼んだピレスが驚嘆したのは、オランダ人がめぐりめぐった南太平洋の広大さに劣らない中国大陸のひろがりだった。

ピレスは、ポルトガルの初の公式使節として1517年に海路から中国の広州に着き、20年には陸路で北京も訪れたが、その後には捕らわれ、生きて中国から帰っていない。

「男は黒木綿の服に絹の丸帽。女はヒダつきの長衣に腰帯。男女とも絹、綿、もしくは皮の靴を履く」

「食事は、食卓に、皿、器、杯を並べてとる。ナイフは料理を切りとるもので、食物は銀、象牙、木などのハシで口に運ぶ」

「主食は煮た米、小麦のパン、犬の肉にいたるあらゆる肉、鳥、魚の料理があり、酒もよく飲む」

中国の日常生活までを細かく観察したピレスの記録は、ヨーロッパ人にとっては夢そのものだったシルク・ロードの源をまざまざと身近にとらえさせることになったが、ピレス自身は、その絹の道のひろがりや深い奥行きをなかに埋没してしまったのである。

実際、東方で最後に当たるこの道程は多様だった。ピレスが豊かな国と記したカウシ・シナにしても、干害と洪水とイナゴの大群に交互に襲われる。今、ホー河デルタといわれる地帯の三千五百村落で、暮らしが立ちゆかぬと離農する流民が相次いだ記録を、支配者のチン一族が1741年に残している。

カウシ・シナの主食はもちろん米だが、1800年代半ばに占領して「コーチシナ」と呼んだフランス人は、トウモロコシにサツマイモとジャガイモまで植えられているのを発見した。ジャガイモは、ホー河上流奥地の農民によれば、マライモ(マレーからきたイモ)なのだった。

東方世界を南太平洋の東はるかまで航海したジャガイモは、反対の西から陸伝いに北東へ山河を超えていっていったのである。

「堀りとれば、大小はあれど形は鈴に似て、色黒く、味は甘辛い薯あり。馬鈴薯という」

1700年に刊行された中国の『松溪県志』にこういう一文がある。これは、植物学ではマメ科のホドイモを指し、ナス科に属するジャガイモのとは違うようである。ジャガイモはオランダ人が持ってきたと噂して、最初は荷蘭薯と呼んでいた中国人もその違いは知っ

ていたらしいが、のちになるとマリス(馬鈴薯)と書いてごちゃごちゃになってしまったのは、カウシ・シナあたりでいうマライモの訛りや転化があるのかも知れない。

なにしろ、19世紀初めのシナとカウシ・シナ国境一帯は、中国かベトナムかはっきりしないほど中国人があふれ、フランスと中国が衝突した「清仏戦争」の戦場にさえなった。この戦場でフランス軍を悩ませた劉永福の指揮する黒旗軍は、食料にしていたじゃがいもを洋芋と呼んでいる。フランス人がポナム・ド・テール(大地のリンゴ)といっているのを、目新しいイモは西洋人とともに海洋を渡ってきたに違いないということで、馬鈴薯も荷蘭薯もマライモも知らない地方兵士が洋芋と名づけたのであろうか。

香料の道をめぐり超えたじゃがいもは、こうして古代から伝わるシルク・ロードの絹の道をもいくことになった。多分、その間には香料の道から中央アジアやインドを抜けた仲間とも落ちあうこともあつただろう。1891年に起工したシベリア鉄道が、1916年に開通した時、蒙古(モンゴル)と満州(中国東北部)の北縁を走る沿線では、じゃがいもの花の開くのが、遅い春の訪れを告げる合図のようにさえなっていた。その種イモは、凍土のツンドラと大森林のタイガに覆われたシベリアのはるか西のロシアか、あるいはさらに西のヨーロッパからはるばるきたものだったかもしれないし、或いはまた東方航路の波濤を超えたり、香料の道と絹の道を超えてきたものだったかもしれない。

いずれにしても、1700年代から1800年代にかけて、ジャガイモは東方どころか西方でも北方でも、その土にもうなじんでいたのである。

タイ	米	7,850,000トン
	トウモロコシ	130,000トン
ラオス	米	550,000トン
	トウモロコシ	15,000トン
中国	米	8,660トン
	薯	21,900,000トン

中国でいう薯はサツマイモとジャガイモの両方を意

味するが、こうしたアジアの国々で固有の作物は米だけだから、どちらのイモにせよウモロコシとともに新大陸から渡ってきたことを問わず語りになっている。そしてまた、1956年のこの収穫数字は、当時、三カ国あわせて七億と推定される人口のうち、一億以上が、新世界からの食べ物で養われていたことを物語っているのである。

たしかに、シルク・ロードは夢のような商品を運んだが、その道を行った商品ともいえない無骨な姿のじゃがいもは、そうした品を作ったり、運んだりする人間の生命を支えたのだった。

三人のポルトガル人を乗せて、タイから中国に向かったジュンコ(ジャンク船)が台風にあい、種子島に漂着した1542年のこの出来事は、東方世界の果てにある日本と、西方世界のヨーロッパとの交流が偶然にはじまったようにも思わせるが、日本の所在などはそれ以前にかなり正しくとらえていたヨーロッパ人にとって、それは当然の成りゆきだったという見方も否定できない。

「ゴーレス(琉球)はレケオともよばれ、航海四十日行程にある島から、良質の金を持って交易にやってくる」(1510年、マラッカ港でポルトガル人ルイ・デ・アラウジョの見聞)

「レケオから航海七、八日のところにジャポン(日本)がある。レケオの船が運んでくる煉瓦の形をして国王の印を打った黄金は、レケオがジャポンから交易で得るものである」(1517年から19年まで、中国の広州に滞在したポルトガル使節トメ・ピレスの伝聞)

1543年から51年まで日本に滞在してスペイン生まれのフランシスコ・ザビエル神父や、1582年から8年がかりでヨーロッパとの間を往復した大友、大村、有馬の九州三藩の使節など、ユーラシア大陸の東と西の両端のそれ以後の交流は、初めが偶然にしては急速すぎるし、日本に事情もひろく知られ過ぎている。オランダ人で初めて東方世界にいったとはいえ、1583年9月から89年1月までの滞在がインドに限られていたリンズホーテンにしても、ヤパン(日本)に関する記録は詳細をきわめていた。

「中国大陸の東方80マイルにあり、マカオから北東へ航海して300マイル、取引港はナガサケ(長崎)」

「山多く、寒い国。川、海で仕切られ、穀物畑は多くないが、常食は米。牛、羊はいるが食用ではなく、魚を好んで食べる」

「中国人はどうるさくなく、人柄は俊敏。物事を早く学びとる。礼儀作法は優雅。武器の名手は多いが、滅多に抜刀しない」

「食事は各自が小卓につき、床に座り、二本の小さな木で食べる。米から醸造した酒を飲み、食後は壺入りの熱い飲み物を飲む」

「王はヤカタイ(屋形)と呼ばれ、収入は米で計る。ヤカタイと家族に必要な以外の収入はクニシュー(国衆)とその部下に分配する」

香料の道先駆けしようと、インド洋を突っ切ってジャワ島に着く近道をしたほどのオランダにとって、日本はまるで未知の世界だったとは言えないことになる。1600年4月、豊後に着いた最初のオランダ船レイフデ号は、ジャワ島をめざした5隻の船隊からの脱落船で、種子島に着いたポルトガル船同様の漂着だったが、1609年のその次の船からは、ジャワ島のジャカトラ出港後に直航してきている。

1613年6月、平戸に入ったクローブ号にジョン・セーリス船長は、準備を十分にしてきたように手まわしよくオランダ商館まで設けた。

「ジャカトラのイモを積んで、ベランダ(オランダ)人はみんな去ってしませばいい」

とジャワ人が囁いた、あのじゃがいもを積んだ船の幾隻かは、1609年から13年の間に、少なくとも九州の湾や町の在り場所はかなりはっきりと知っていたのである。

「ヤパン(日本)は、毎年二万キロほどポルトガルに銀を売っている。そのため、ポルトガル船はナウ・ダス・プラタス(銀船)とさえ呼ばれている」

とリンズホーテンは記している。トメ・ピレスがいう「煉瓦の形をした黄金」も日本のものだとすると、マルコポーロが黄金の国ジパングといったのは夢物語とばかりとは必ずしもいえない。

しかし、それほど国中が豊かな輝きに満ちていたかといえば正反対で、ジャコラのイモを積んだオランダ船がきた1600年代だけで、七回も飢饉に襲われている。その末期から1700年代にかけては爛熟した文化を謳歌したあの元禄時代だが、元禄8、9年と連続したあとに、14年から16年にかけても、凶作と飢饉が相次いだ。

「幼少より飢え、寒さ、労働に耐えるため、ヤパンの人間はきわめて忍耐強い」

とリンスホーテンは書いているが、1700年代半ばの享保飢饉では全国二百五十藩のうち四十六藩が大凶作、飢餓死者九十六万九千九百人に及んだと『徳川実記・第五編』は記録している。

新世界を発見し、東方航路もひろげた旧世界のヨーロッパで、民衆が飢えと物価の値上がりに苦しんだように、黄金の国・日本も実は生きていくのがやっという民衆に満ちていたのだった。いや、民衆だけではない。米沢藩主の上杉治憲は、日常の費用が年間千二百両だったのを二百両に減らして食料の備蓄や産業を興す資金にしたし、大陸からの襲来を防ぐ第一線にあった対馬で、三十四代にわたり藩主だった宗家は、十五万二千四百五十両の借財を抱えて明治維新を迎えた。借金だらけで、王都も転々としたスペインや、女王の戴冠後のやりくりで貴族の館を歴訪したイギリスなどのヨーロッパの王家と大差はない。東方世界も西方社会も、暮らしとかやりくりということでは似たようなものだったことになる。

九州の平戸に着いたじゃがいものひろまり方も、だから、新大陸からスペインのセビリヤに上陸した以後と似ている。

無骨な姿を珍しがられたり、気味悪がられたりしたが、1755年に四国を襲った宝暦飢饉で、九州から豊後水道と瀬戸内海を越えた土地にひろまった。1783年に北陸と東北が見舞われた天明飢饉で北日本へ進んでいった。米や麦はまったくとれない頃の北海道から、探検家で地理学者の近藤重蔵が、友人の最上徳内にこういう便りをしたのは1798年のことである。

「ジャガタライモは、エゾ(北海道の土地)の者だけでなく和人(本州から渡った者)も栽培している。ニシン不漁の時には、いまや欠かせない食物となっている」

この種イモが日本本土から渡ったものか、1700年代から往来はじめたロシア人がもたらしたものか、はっきりしない。

津軽海峡を越えて本土から渡っていった、と考えるのが順当なところだが、宗谷海峡を渡ったサハリン(樺太)ではシベリアを越えて太平洋にでたロシア人はもちろん、そのロシア人にならってアイヌ族の人々までじゃがいも栽培をはじめていたのである。

いずれにても、じゃがいもが世界を一周した末に、北海道に根づいたことははっきりしている。世界一周の間に民族も人種も超えて飢えを救い、養ったように、日本人を養ってくれたことも、またまぎれもなかったのである。

(終わり)

(なお、執筆者の杉田房子氏は昨年2019年10月6日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします)

4. 1990年ころのボリビア通信事情

(その1)

一般社団法人 日本ボリビア協会 事務局

吉田 憲司

はじめに

今から約30年ほど前、1990年から約2年、ラパスに本拠を構えるボリビアの電気通信公社(ENTEL: Empresa Nacional de Telecomunicaciones) 所有の電気通信学園(ICAPTEL: Instituto Capacitación de Telecomunicaciones) (現在は廃止) にインストラクターとして派遣されました。業務内容は、光ファイバー伝送技術の普及です。

当時の記憶をたどりながら現地で見聞きした通信事情について書かせて頂きます。かなり古いことなので、曖昧な記憶で間違った内容を記載しておりま

したらご容赦願います。また、私はラパス以外の状況については直接見聞したのではなく、ICAPTELという現業以外の職場への配属であったため、理解の異なる点などありましたらご容赦願います。また通信設備の設置場所等も含めた電気通信ネットワークの詳細については、30年も前のことながら防衛機密に成り得る情報ですので具体的・詳細に記述することは憚られます点、ご了承ください。

私の専門職種は搬送です。「搬送」という職種は荷物等の運搬業ではなく、AMラジオのように音声等を信号化し搬送波で多重伝送する長距離（市外）通信技術の職種です。搬送は西語で *Teléfono de transporte por onda* と言い、英語では *Carrier Transmission* となります。通信がデジタル化された後はアナログ技術用語「搬送」は設備も言葉としても使われなくなったため職種は「デジタル伝送」へ移行しました。

ボリビアへ出向く際、日本の所属会社から配布された「世界国別電気通信便覧」（1988年版）のボリビアの数ページに、組織構成やネットワーク規模の説明と共にボリビアの人口570万（ほぼ当時の愛知県人口）、国の面積は日本の約3倍と記されていました。人口が現在のほぼ半分でした。人口捕捉調査の取りこぼしも考えられますが、増加率はかなりのものです。日本のようなどこに行っても家や道路が見える環境とは通信サービスを提供するうえで雲泥の差があると覚悟した次第です。

郵便事情

ボリビア赴任当初、地球の反対側に位置する日本との連絡について思いを馳せました。当時、国外等への日常的な通信手段は郵便が一般的です。ラパスはさすがに首都機能を備えたボリビアの中心都市で、ラパス中央郵便局：Correo Central de Lapaz（中央とありますがラパスには郵便局は一つしかありません）より日本宛に差し出した郵便物は約1週間で宛先に着いていたようです。ラパス～東京間は往復約半月にて郵便のやり取りができていました。中国

や韓国等の近隣国以外からの日本宛て国際郵便物は差出から到着まで約1か月以上かかると言われていた時代に、結構なスピードで地球の反対側と郵便物で連絡が取れることに感激したものです。ちなみにボリビア着任前に滞在していたメキシコの地方都市クエルナバカから滞在最終日に日本宛てに出した葉書は1ヶ月ほど経って日本に着き、一方、ボリビア到着後1週間ほどで出した葉書の方は1週間ほどしか掛からず、遅く出したほうが2週間も早く着いていたこととなります。メキシコの地方都市からだと1か月以上かかったこととなります。

ボリビアから日本宛ての航空郵便は週一の火曜日ラパス発の便で、また日本からは木曜日発の便を利用していました。任期終了近くに、職場でのカウンターパートの方を日本へ研修派遣させるよう調整した時、日本の窓口と郵便でやり取りをしましたが、日本発水曜日の消印が押された郵便物が、翌月曜にはラパス郵便局私書箱に届いたのでびっくりしました。日本から南米に向けては日付変更線をマイナス1日で跨ぐため実質1日の差がでますが、それでも金曜日にはラパスの郵便局に届き私書箱に投函されたこととなります。私は日本で東京からの郵便物が一番遅く着くところで生まれ育ちましたので、東京近辺に住むまで東京との郵便物のやり取りに4営業日要しました。ラパス～東京間の郵便事情は地元に住んでいた時より良いな、地球の反対側なのにかかる時間が日本国内とほぼ同じことなのはすごいことだな、と感心しました。ラパス以外の地域はラパスから転送する時間がかかるため、それより2～3日余計にかかるようでした。

ボリビアの郵便事業本体では集配業務を行ってないため、郵便を出し受け取るには郵便局まで出かける必要がありました。受け取るために郵便局に私書箱（Cajon Postal）を借り、私書箱に配達される郵便物を引き出します。国際小包（EMS）は私書箱に到着連絡書を入れてくれるので郵便局内の税関で送付物と同額の税金を払い受け取ります。

郵便物を送る場合には窓口で差し出し送料を算定

してもらい料金と共に差し出しますが、最初に利用した際、Estampilla o Máquina?と窓口職員に言われ意味が分からずアタフタしました。切手を貼るか料金スタンプを機械で押すかを聞かれていると分かったのは、ボリビアでは切手について Sello という単語を使わず Estampilla を使うということを知った後のことでした。エルアルト等郵便局から距離のある場所では皆が個々に郵便局に出かける不便さを解消するため、配達・差出しの請負を業にしている人を共同で雇っているということを現地の人から聞いたことがあります。

ラパス中央郵便局は高層の運輸通信省ビルが赴任直前の1990年2月頃に完成したので中央通り(マリスカル サンタクルス通り)の道を挟んだ反対側の2クアドラ上側(ムリージョ広場寄り)の旧建物から引っ越したばかりで新しく快適でした。



写真4-1 通信省ビル1階のラパス中央郵便局 (現在)

国際郵便には結構タイムラグがあります。中学生の時からアマチュア無線を趣味としていたので海外に出るときは、ぜひ現地からの運用を実現したい、と考えていました。実際日本から機器を持ってボリビアに渡り、現地での無線局免許で1年半ほど運用しましたので、その時の開局・運用の顛末については別途、機会を改め書かせて頂きたいと思っています。日本を含めかなりの方(局)と交信させて頂き、リアルタイムの遠距離無線通信を堪能しました。

電気通信の変遷

さて電気通信の推移についてです。1990年ころの電気通信は一般的に世界中の国が電話をまだ中心にサービスを提供していました。電気通信では伝達できる情報量が飛躍的な技術革新で急激に増大してきた歴史があります。当初、文字を電気信号として送ることが可能となったので、簡便な電報(電信)方式が発達しました。人と電信機の設置場所までの間は手紙と同じ方法を踏襲しています。

次により簡便な通信方法として音声も電気信号に変えて伝送する電話が安価になり普及します。ただこの方式はリアルタイムで通信相手を拘束する不便さが残ります。

信号の扱いの簡便さと信号処理能力の向上が電話網をデジタル化に向かわせ、また種々の技術発展から漢字かな文字混じりの日本文作成も容易となり、またコンピューター通信の一般化でEnd to Endのデジタル通信が普及してくると、リアルタイムで相手に拘束されず、記録の残る電子メール等の文字・画像通信が主流となりました。使い勝手が良く安価な通信方式へと進むのは世の中の流れです。

1990年代のボリビアの電気通信は、まさに電話サービスが中心のアナログ方式からマルチメディア通信にも対応・包含するデジタル伝送方式に移行しようとデジタル通信機器を導入する転換期のところでした。光を点ける・消すことでON・OFFとしてデジタル信号を伝送する光通信方式導入はまさに時代の流れに沿う施策でした。

ボリビアでの電気通信の体制

当時のボリビア電話サービスの構成は、国としての運輸通信省の管轄下に 国際・市外通信を独占する電気通信公社(ENTEL)があり、市内電話は主要都市(県都)をサービス拠点とし、ほぼ各県単位をエリアとする電話利用協同組合がサービスを提供しており、ラパスだとCOTEL(1989年に名称変更)サンタクルスだとTASA(現在はCOTAS)、コチャバンバはCOMTECO、ポトシはCOTAP等々の組織名称です。

その他の県でサービスを行っている電話組合の名称は前述の「国別電気通信便覧」に網羅されておりましたが先念し資料を探し出せません。この市内電話サービスをしていた組織が会社・企業 (Empresa) ではなく協同組合 (Cooperativa) の形式をとっているのは税制面での大きな優遇があるためです。各電話利用協同組合は我々日本のから見ると、協同組合として運営されているイメージではなく、間違いなく普通の立派な規模・組織を持った大会社として存在していました。会社・企業 (Empresa) を使わず協同組合 (Cooperativa) としているのは節税のみの名称使用だったなと思います。

市内電話事情

各市内電話会社の電話交換機は、当時ボリビアに事務所を置いていた日本の沖電気製のものを導入しておりました。ボリビア国内で後日、沖電気のお世話で地域電話会社 COTEL の交換機械室を訪問させて頂きましたが日本の電話局の交換機械室とはほぼ同様な佇まいになっており、日本仕様の C8 形と思われる大形クロスバー交換機が設置されていて、日本の交換機械室に舞い戻ったかのような錯覚を抱きました。この COTEL の機械棟ビルには営業窓口も派手な看板もなく周りに立っているビルとも変わりがなくて、とても電話局規格の建物には見えません。クロスバー交換機そのものは元々分厚い鉄骨フレームを使用した頑丈に作られた構造物なので、かなりの重量になり床荷重も半端ではないものです。床が交換機の重量に耐えられるか、ボリビアの建築物の華奢な作りを目のあたりにしていたので大丈夫かな、と心配になったものです。

ラパス市内の状況を主に当時のボリビア電話事情を顧みると、都市部においては、住宅の電話加入率はかなり高く日本と同程度、電話線の地中化は日本より数段進んでいてラパス市内では電信柱を殆ど見かけず、道のコーナーあたりに通信ケーブル終端配線盤容箱が設置されていました。

それは日本の地中化電力線の電力トランス収容箱のような形をイメージして頂ければよいと思います。たまに電話の開通・撤去の作業で地域電話会社の職員が設置箱の端子盤作業を行う風景を見かけました。

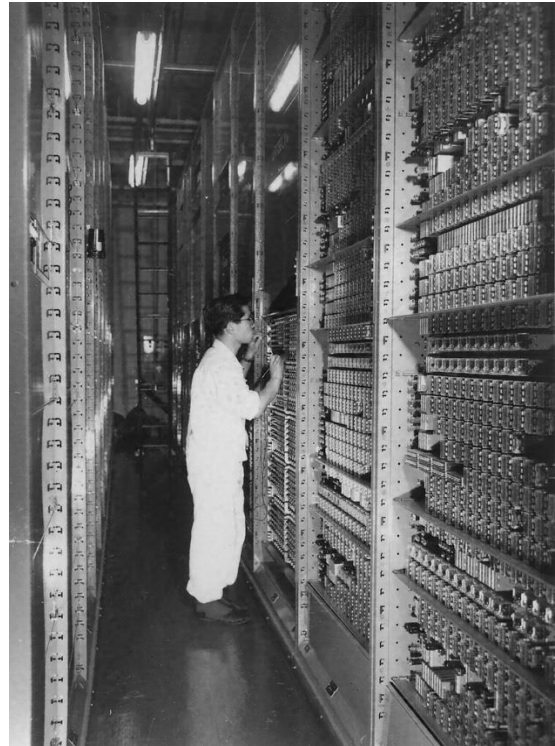


写真 4-2 ボリビアでは日本仕様のクロスバー交換機の設置を施工している (写真は日本の電話局のもの)

1991年3月頃の沖電気ラパス事務所の田中さん南雲さんより「サンファン移住地で、住民の方々が出資し、無電話地域だったサンファン移住地に新しく電話を導入するための工事があるので手伝ってみないか、」とのお誘いを頂いたので職場に、沖電気の工事手伝いの申請をして1週間ほどサンファンに滞在させて頂きました。

当時はボリビアから日系の方が日本に仕事に出ることがブームになっていた時期でもあり世界中にリアルタイムで連絡が取りあえる通信手段として電話くらいしかなかった時代ですので、全世界に連絡が取れる電話を持ちたい気持ちは非常によくわかりよい経験になりました。当移住地では加入者電話線を引いて電話機を設置する方式とは少し違った方式だったので、この顛末も別に機会を得て書かせて頂き

たいと思っております。

電話のかけ方・郵便の出し方については「地球の歩き方」等に比較的詳しく紹介されていますので今更ですが説明させていただきます。家庭設置の固定電話は、市内通話は1ヶ月を区切りとした定額料金で通話時間の制限もないため、電話を設置している商店やキオスコが公衆電話代わりに公衆電話料金と同額で電話利用者に使用させていました。市内交換機が沖電気製なので電話機も沖電話製の日本仕様600形カラー電話のアイボリー色が標準で配られており電話が置いてある光景は日本と何ら変わりません。使用方法は日本とほぼ同じですが、ちょっと戸惑うのが呼出し信号音にプルプルという震えがないことです。呼出の音と話し中の音が似ているため掛けてすぐ呼出音を聞き、使用中と勘違いし切ってしまったことが何度もありました。

公衆電話は、当時、数はあまり多くはないものの大通り等に設置されており、Fecha と呼ばれる公衆電話専用コインで市内電話のみのサービスを提供していました。Fecha は近くの商店・キオスコ等や公衆電話近くにいる販売人から買って使用します。商店・キオスコは電話を所有していることが多いため普通に通話が必要な場合にも Fecha を買わずにお金を払い電話を借りたりします。当然のことながら各都市の電話会社毎に Fecha は違います。コチャバンバへ出かけたおり、朝4時ころに着き予約のホテルに場所の確認のため公衆電話を使おうとしたがラパスで購入の Fecha が使えない。警邏中の警官に公衆電話の Fecha の入手方法を尋ねると、手持ちの Fecha を渡してくれたが代金を払おうとしても受け取らない。結局その厚意に甘んじてしまいました。

市外・国際サービス提供している ENTEL の通信網のデジタル化を受け、ラパスの COTEL を始めとした地域電話各社もデジタル化を推進させインターネットサービスも始めてゆきました。COTEL もデジタル交換機の導入に先駆け1991年には光伝送・近距離デジタルマイクロを組み合わせたデジタルループ伝送

路網を、オブラヘス、ラパス中心地、エルアルト間で導入しました。

市外国際電話事情

1990年当時、ボリビアの市外(県際)・国際の電気通信網を所有・独占していたのは当時国営企業であった電気通信公社 ENTEL で、衛星通信地球局・マイクロ波通信網・短波通信回線を所有し、各地域電話会社を結んでしました。各地域電話会社は市外・国際通話を ENTEL の通信回線を経由して疎通させていました。



写真4-3 ENTEL サンタクルス 局舎 (現在)

ラパスの衛星 (INTELSAT) 地球局はチャカルタヤの麓にありラパスの ENTEL 本社の屋上に設置されたパラボラアンテナからビジャファテマの上方の無給電アンテナで反射し、その裏側にある地球局をマイクロ波で結んでいました。

データ回線の衛星アップリング局はサンタクルスの ENTEL だということも聞いたことがありました。

30年前はボリビアからの国際回線は INTELSAT と呼ばれている衛星回線がほぼ独占していましたが、現在は、後で述べる国境を跨ぐ地上回線も存在します。

(つづく)

ボリビア関係刊行物の頒布斡旋

1 『Los japoneses en Bolivia』 2013-9

『100 años de historia de la inmigración japonesa en Bolivia』 (スペイン語版) を原典として2012年までを追補 在庫多数

2 『ボリビアを知るための73章』 (第2版)

2013-2 明石書店刊行

※1は 2500円、2は2000円 (いずれも税・送料込)

※ご注文は下記当協会までメール又は電話でお名前、ご住所、電話番号、書籍名、冊数をご連絡ください。

admin@nipponbolivia.org 042-673-3133

※口座番号、名義人は発送時にご連絡します。

協会関係活動の近況

○3月11日 新駐ボリビア日本国大使 伯耆田修氏と面談 JICA横浜にて。

○3月19日 2月末日に着任した駐日ボリビア多民族国大使館のイサベル・ダレンツ・クルトレラ新臨時代理大使を協会役員が表敬訪問

ボリビア関係イベント近況

○1月13日

ボリビア研究会 東京大学ラテンアメリカ研究会主催 東大駒場18号館 10月20日の大統領選挙やり直し以後のボリビア政治情勢につき、研究者が報告し、活発に質疑応答。参加者100名を超える大盛況。

○2月8日 在日ラテンアメリカ人・心の健康講演会 両国・東京医学技術専門学校

MAIKEN主催 言葉の壁に悩む在日ラテンアメリカ人の心療相談に係る講演会 参加者約20名

○2月11日 川崎市国際Fiesta 川崎市幸市民会館 川崎市国際交流団体主催 川崎市・横浜市・湘南地区在住の在日ボリビア人が多数参加。

○2月22日 日本ボリビア友好協会年次総会 墨田区吾妻橋集会所 墨田区など東京下町地区在住在日ボリビア人主催。駐日ボリビア多民族国大使館からホセ・バスケス臨時代理大使、休暇帰国中のJICAボリビア事務所小原学所長参加

編集後記

新型コロナウイルスは世界的パンデミックの段階に突入し、私たちが今まで経験したことのないウイルスによる移動制限や規制など急激な社会生活の変化に晒されています。この問題の終息はまだ見通せませんが、今後数か月の社会・経済の動きに注目していきたいと思います。

編集委員 椿 秀洋 杉浦 篤 細萱 恵子

Copyright© 2002-2019

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)